

福井裕輝

精神科医



見通しのきかない人間の内奥を、脳神経科学を手がかりに凝視する。向き合った犯罪者は千人を超す

異端の医師が挑む現代の「罪と罰」

批判は覚悟のうえ。犯罪「加害者」の治療に力を入れ、世の中にその必要性を訴える。
加害者が減らない限り、被害者も少なくなることはない——。
傷ついた患者を前にして覚えた無力感と、「悪」への尽きない関心が一人の精神科医を駆り立てている。

文＝田村栄治 写真＝会田法行

黒のスーツに身を包んだ精神科医の福井裕輝（ふくい ゆうき）は、証言台のいすに腰を下ろすと、壇上に並ぶ裁判官と裁判員に向き合った。

今年3月、広島地裁302号法廷。福井は愛用のマックブック・エアを操作し、裁判員らが見るモニターに脳の画像や検査データを映し出すと、いつもの淡々とした口調で話し出した。

「他人の感情の読み取りには脳の扁桃体が関係していますが、この被告には、その部位の機能低下があると思います。苦痛がわからないのです」

「刑務所でも毎日2回はマスターべーションをするなど、通常の性欲とは言えません。（脳の）性欲を制御する部分だけでなく、そもそも欲求に関係する部分に問題があるとみています」

福井の右側の長いすには、刑務官2人にはさまれて、紺色ジヤージ姿の初老の男が座っている。短身、小太り。血色のよい顔はあどけなさすら感じさせ、全体に純朴そうな雰囲気が漂う。

だがこの男、20歳のとき4歳女児らへの強制わいせつ罪で1年半服役して以来、窃盗や強制わいせつ、強姦致傷などを重ね、刑務所に入つたり出たりを9回繰り返してきた「悪人」だ。53年の半生のうち、のべ30年以上、刑務所で生活。強姦致傷罪で6年半服役した九州の刑務所を出てわずか1ヵ月後の一昨年10月、60代女性の顔を殴つて強

姦したなどとして逮捕・起訴されたのだった。

弁護士の依頼で、福井は事件記録を読み、被告に書面で質問し、拘置所で面談。そしてこの日、メガネの奥の切れ長の目を裁判員たちにちらりと向けると、こう訴えかけた。

「この被告は『過剰セックス障害』と考えられます。この障害は病気と考え、治療するのが世界的な流れです。居心地がよくなってしまつた刑務所にこの被告を入れることに、犯罪を抑止する効果はほとんど、というか、まったくありません」

病人には必要な治療を——。当然と思えるこの考え方、精神障害のある犯罪者にも分け隔てなく当てはめようと、福井は孤軍奮闘を続けている。

や放火、強姦などの重大犯罪人は、裁判官と医師によって必要と判断されれば、医療機関で治療を受ける。また、精神障害のある人が微罪を犯した場合、裁判を経ずに入院となることもある。

これらが現在、精神障害のある犯罪者が医療につながる三つのケースだ。だが、障害が認定されず、医療と無縁のままいる犯罪者は大勢いると、福井はみている。

先の男もその一人だ。裁判では、裁判所指名の鑑定人（精神科医）が「認知機能に大きく影響を及ぼす所見を認めない」と結論づけた。しかし、鑑定の際の脳画像検査では、扁桃体など脳の一部の血流低下が認められた。そのことをふまえ、福井は法廷で、鑑定結果をこう切り捨てた。

「精神科医同士で言い合うのは躊躇しますが、理屈がちょっとわからないと正直思っています」

福井によれば、「医師の中でも文系的な人が多い」司法精神科医には、科学に興味が薄い人が少なくない。最近のMRIやPETなどの脳画像検

査では、精神障害の原因とされる脳機能障害が読み取れる。だが「文系タイプ」の医師たちはそれらを十分活用せず、昔ながらの面談やテストに頼りがちだ。そのため、主觀の余地が大きくなり、「心神耗弱」とされ、不起訴処分や、裁判で無罪や執行猶予とされる人もいる。彼らのうち、殺人

「犯罪者が嫌いで、ともかく刑務所に入れておこ

犯罪者の病理見つめる 弁護士の「駆け込み寺」

国統計によれば、刑務所や少年院の入所者の

1割近くに、精神障害やその疑いがあるとされる。

彼らは原則、それぞれの施設で治療を受ける。一方、犯罪を犯しても精神障害による「心神喪失」「心神耗弱」とされ、不起訴処分や、裁判で無罪や執行猶予とされる人もいる。彼らのうち、殺人

うとする精神科医もいます」

「犯罪を繰り返す人を、刑務所に一定期間閉じ込めるだけでいいのか——。そんな疑問を抱える弁護士たちにとって、福井は「駆け込み寺」になっている。意見書の依頼は年數十件に上り、被告人との面談や法廷での証言で、福井は全国を飛び回る。冒頭の男の弁護人、定者吉人の話。

「このまま刑務所に入つてもまた同じじゃないか、これだけ似た犯行を繰り返すからには何かあるんじゃないかな。そう思ってネットで探して唯一行き当たったのが福井先生でした。『治療が必要です』と言われ、やはりそうかと思いました」

名古屋の本田直樹も、福井の存在をウェブで知り、連絡を取つた弁護士の一人だ。

今年1月中旬、その本田の案内で名古屋拘置所の19番面会室に入った福井は、透明なアクリル板をはさんで40代の男と相対した。表情は虚ろで、粗暴な印象は受けない。しかし、帰宅途中の女性を空き地に連れ込んで強姦しようとしたなどとして、3件の強姦未遂事件で起訴された被告人だ。

今回の事件の7年前にも、強制わいせつ致傷罪で懲役2年の有罪判決を受けたが、精神障害と診断されたことはない。

30分経つたころ、男の後ろで座つていた刑務官が「そろそろ……」と口を挟んだ。裁判所命令の精神鑑定なら、被告と話す時間は必要なだけ保証される。しかし、弁護士依頼の面談は、一般的の面会と同じ程度に制限する拘置所も珍しくない。このことと、脳画像検査を請求しても裁判所がまず認めないことが、福井の仕事を困難にしている。「脳画像検査をしたいと言つたら、『まず異常を証明するように』なんて、わけのわからないことを言ってくる裁判官もいる。被告人の病理をちゃんと理解しようとせず、ややこしいことは避けようとしている」としか思えません」

1カ月後、福井が出た意見書。

「他者の感情状態の認知、不適切な衝動を抑制する能力などの欠陥が示唆される。何らかの精神医学的異常が存在している可能性が高い」

「できるだけ早期の医学的アセスメント、医学的心理学的治療が望ましい。刑罰よりも、社会内の日常的な環境の下で行われる医学的治療こそ、予後および再犯のリスクを下げられる」

弁護士の本田は言う。

「取り調べ段階の調書には、強姦もののアダルトビデオが好きとあるけど、正しい?」

「感情をみじんも表さず、福井が尋ねる。『はい』

「どういうのがもつとも興奮します?」

「服やパンストが破かれはぎ取られるのが……」

「はい」

30分経つたころ、男の後ろで座つていた刑務官

が「そろそろ……」と口を挟んだ。裁判所命令の精神鑑定なら、被告と話す時間は必要なだけ保証される。しかし、弁護士依頼の面談は、一般的の面会と同じ程度に制限する拘置所も珍しくない。このことと、脳画像検査を請求しても裁判所がまず認めないことが、福井の仕事を困難にしている。

「脳画像検査をしたいと言つたら、『まず異常を証明するように』なんて、わけのわからないことを言ってくる裁判官もいる。被告人の病理をちゃんと理解しようとせず、ややこしいことは避けようとしている」としか思えません」

1カ月後、福井が出た意見書。

「他者の感情状態の認知、不適切な衝動を抑制する能力などの欠陥が示唆される。何らかの精神医学的異常が存在している可能性が高い」

「できるだけ早期の医学的アセスメント、医学的心理学的治療が望ましい。刑罰よりも、社会内の日常的な環境の下で行われる医学的治療こそ、予後および再犯のリスクを下げられる」

弁護士の本田は言う。

でした。性犯罪者に対し理解できないという気持ちもあった。福井先生と出会つて、『治療』という視点の重要さに気づかされました』

性犯罪者治療で再犯ゼロに 「司法と医療の連携重要」

都内のオフィスビルの一室にある、性障害専門医療センター（SOMEC）。ここが、福井の活動拠点だ。看板のない部屋で、性犯罪歴のある人々の診療に当たる。中心は認知行動療法。頭に浮かぶ考えと現実の違いに目を向けさせるなどし、思考のゆがみに気づかせる。数は少ないが、薬物療法にも取り組んでいる。福井によると、性倒錯的行動や衝動性、空想などを減らすことができるという。現在70人ほどの患者を数人の心理士とともに診療。これまで再犯はゼロだという。

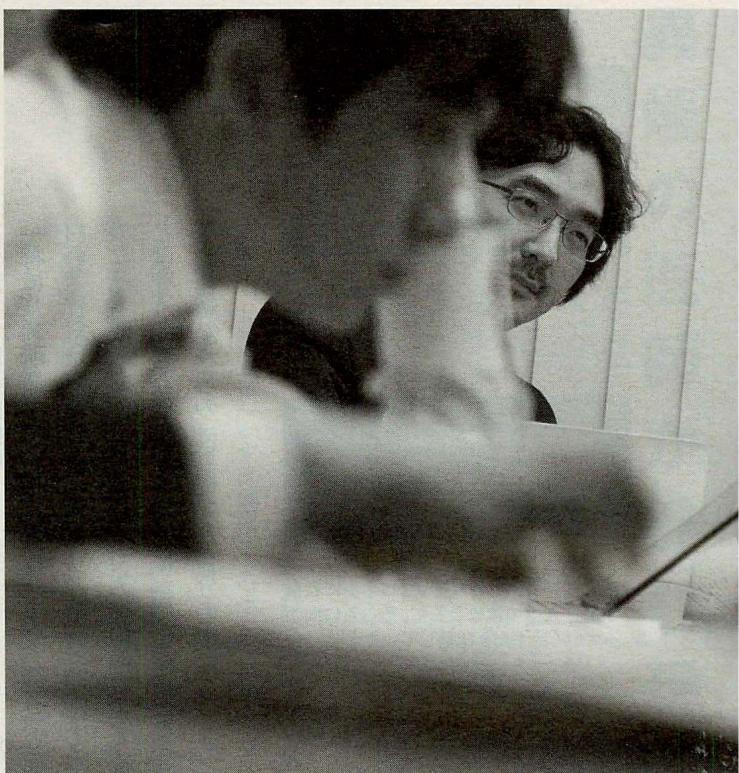
講演・講義の依頼にも積極的に応じている。多いのは弁護士グループだが、警察官や学生たちを相手に話すこともある。今年4月には自民党の調査会で、「司法と医療の連携が重要」と強調した。

福井は今春、ストーカーの危険度を判定するプログラム作成者として注目を集めた。被害の訴えが年2万件近くに達するなか、効果的な対応を模索する警察側から協力を求められた。高危険度とされた人にはカウンセリングなどを勧め、事案の深刻化を防ぐことも検討している。

「ストーカーを『病人』とみる医師は福井先生が初めて。病気だと言えば、治療を求められるから弁護士の本田は言う。



井に電話があつた。彼女だつた。「きのう、父とホテルに行きました」。冷静さには自信のある福井だが、この電話以降、この日の診察のことは覚えていない。40代半ばの父親は、遠洋漁業の漁師でアルコール中毒だつた。女子中学生は、性的虐待は小学校低学年から続いていること、派手な下着をつけさせられセックスを強要されることなどを打ち明けた。福井が父親に問うと、「娘に愛情をもつて接してなにが悪い」と返ってきた。



です。その意味で、勇気のある人だと思います

多数のストーカー事案に関わってきた都内のカ

ウンセラー、小早川明子はそう話す。

加害者、それも性犯罪の加害者への医療提供を唱える福井は、批判を浴びることも少なくない。

目立つのは、「救うべきは被害者」という声だ。

福井の活動の原点は、ある被害者と向き合つた経験にある。

京都大学医学部を卒業した福井は、その翌年、福井県小浜市の公立小浜病院の精神科医となつた。

ほどなくして、父親に連れられて女子中学生が来院した。リストカットの常習者で、「赤ちゃんの泣き声が聞こえる」「誰かが話しかけてくる」などと話した。催眠療法で内面に分け入ると、60人以上の人格が潜んでいた。心に深い傷を残す衝撃的な体験をしたはずだったが、福井はそれが何なか把握できなかつた。

初診から3カ月ほど経つたある日、診察中の福井に電話があつた。彼女だつた。「きのう、父とホテルに行きました」。冷静さには自信のある福井だが、この電話以降、この日の診察のことは覚えていない。40代半ばの父親は、遠洋漁業の漁師でアルコール中毒だつた。女子中学生は、性的虐待は小学校低学年から続いていること、派手な下着をつけさせられセックスを強要されることなどを打ち明けた。福井が父親に問うと、「娘に愛情をもつて接してなにが悪い」と返ってきた。

研究者になろうかと考えた一方で、心理学や精神医学への興味も膨らんでいた。中学生のころから、ドストエフスキーや横溝正史などの、人間の性質にあることは明らかだった。精神科医として娘の苦しみに一緒に向き合うことはできたが、根本解決においては役に立たなかつた。

このときの無力感が、被害者をなくすために加害者をなくす、現在の活動につながつていています

です。その意味で、勇気のある人だと思います

多数のストーカー事案に関わってきた都内のカ

ウンセラー、小早川明子はそう話す。

加害者、それも性犯罪の加害者への医療提供を唱える福井は、批判を浴びることも少なくない。

目立つのは、「救うべきは被害者」という声だ。

福井の活動の原点は、ある被害者と向き合つた経験にある。

京都大学医学部を卒業した福井は、その翌年、福井県小浜市の公立小浜病院の精神科医となつた。

ほどなくして、父親に連れられて女子中学生が来院した。リストカットの常習者で、「赤ちゃんの泣き声が聞こえる」「誰かが話しかけてくる」などと話した。催眠療法で内面に分け入ると、60人以上の人格が潜んでいた。心に深い傷を残す衝撃的な体験をしたはずだったが、福井はそれが何なか把握できなかつた。

見えたものを写真のように記憶できる能力も持つていた。教科書を何ページも覚え、頭の中でページをめくり、ズームすらできたといふ。

河合隼雄の超天才少年

河合隼雄の超天才少年

河合隼雄の勧めで精神科に

子どものころの福井は無類の本好きで、どの科

目でも成績はよかつた。しかし学校、特に中学・

高校は苦痛だつた。福井が振り返る。

「規律の厳しい校風が合わないのもありましたが、A D H D (注意欠陥多動性障害) でしたので、授業を50分間ずっと聞いていられなかつたんです。

数学の時間には英語を、歴史の時間には数学を勝手にやるといった感じでした。だから、学校で何かを習つたという記憶はないんです」

「暴力や犯罪はモラルや倫理の問題だとして、科学や医学に含めるのは世界的に抵抗が強い。ケアすべきは被害者だという声も大きく、加害者にも

治療が必要という考えは一種のタブーになつてい

る。そんな状況で、チャレンジングな発表をして

いる姿を見て、この人は伸びると思いました」

そう話すのは、国立精神・神経センター精神保

び、大学院にも合格した。

研究者になろうかと考えた一方で、心理学や精

神医学への興味も膨らんでいた。中学生のころか

ら、ドストエフスキーや横溝正史などの、人間の

ドロドロした部分を凝視した作品に引き込まれた。

前、校内の廊下で顔を洗つていた河合隼雄に相談

すると、精神科医を勧められた。決意を固め翌年、

医学部に入り直した。母千賀子の回想。

「高校3年のとき、医学部に行く気はないのかと夫が聞くと、『血を見るのが嫌いだから行かない』

と言つてました。それが大学3年になると、『無機質なもの扱うのは耐えられない。辞めて医学

部を受け直す』なんて言つてきたんですね」

やや遠回りして29歳で精神科医になつた福井だ

が、頭角を現すのは早かつた。医師4年目からは

京都医療少年院に勤務。世間を震撼させた凄惨な

事件を含め、様々に法を犯した少年たちに向き合

つた。検査や面談を重ね、脳の機能障害の影響を

確信。学会などで発表し、注目を集めた。

「暴力や犯罪はモラルや倫理の問題だとして、科

学や医学に含めるのは世界的に抵抗が強い。ケア

すべきは被害者だという声も大きく、加害者にも

治療が必要という考えは一種のタブーになつてい

る。そんな状況で、チャレンジングな発表をして

いる姿を見て、この人は伸びると思いました」

そう話すのは、国立精神・神経センター精神保

論理的思考力はもちろん、哲学や宗教、思想にも造詣が深い。将棋、麻雀も強かつた

中学から大学まで一緒に明斷正樹は言う。

数学や物理が得意だったことから、京大工学部に進んだ。自由でオープンな校風が好きだつた。

原発への問題意識もあつて放射線防護について学

び、大学院にも合格した。

研究者になろうかと考えた一方で、心理学や精

神医学への興味も膨らんでいた。中学生のころか

ら、ドストエフスキーや横溝正史などの、人間の

ドロドロした部分を凝視した作品に引き込まれた。

前、校内の廊下で顔を洗つていた河合隼雄に相談

すると、精神科医を勧められた。決意を固め翌年、

医学部に入り直した。母千賀子の回想。

「高校3年のとき、医学部に行く気はないのかと夫が聞くと、『血を見るのが嫌いだから行かない』

と言つてました。それが大学3年になると、『無機質なもの扱うのは耐えられない。辞めて医学

部を受け直す』なんて言つてきたんですね」

やや遠回りして29歳で精神科医になつた福井だ

が、頭角を現すのは早かつた。医師4年目からは

京都医療少年院に勤務。世間を震撼させた凄惨な

事件を含め、様々に法を犯した少年たちに向き合

つた。検査や面談を重ね、脳の機能障害の影響を

確信。学会などで発表し、注目を集めた。

「暴力や犯罪はモラルや倫理の問題だとして、科

学や医学に含めるのは世界的に抵抗が強い。ケア

すべきは被害者だという声も大きく、加害者にも

治療が必要という考えは一種のタブーになつてい

る。そんな状況で、チャレンジングな発表をして

いる姿を見て、この人は伸びると思いました」

そう話すのは、国立精神・神経センター精神保

井に電話があつた。彼女だつた。「きのう、父とホテルに行きました」。冷静さには自信のある福井だが、この電話以降、この日の診察のことは覚えていない。40代半ばの父親は、遠洋漁業の漁師でアルコール中毒だつた。女子中学生は、性的虐待は小学校低学年から続いていること、派手な下着をつけさせられセックスを強要されることなどを打ち明けた。福井が父親に問うと、「娘に愛情をもつて接してなにが悪い」と返ってきた。

福井が打ちひしがれたのは、こうした父娘の存在により、自分の非力さだつた。問題は父親の病的性質にあることは明らかだった。精神科医として娘の苦しみに一緒に向き合うことはできたが、根本解決においては役に立たなかつた。

「このときの無力感が、被害者をなくすために加害者をなくす、現在の活動につながつています」

です。その意味で、勇気のある人だと思います

多数のストーカー事案に関わってきた都内のカ

ウンセラー、小早川明子はそう話す。

加害者、それも性犯罪の加害者への医療提供を唱える福井は、批判を浴びることも少なくない。

目立つのは、「救うべきは被害者」という声だ。

福井の活動の原点は、ある被害者と向き合つた経験にある。

京都大学医学部を卒業した福井は、その翌年、福井県小浜市の公立小浜病院の精神科医となつた。

ほどなくして、父親に連れられて女子中学生が来院した。リストカットの常習者で、「赤ちゃんの泣き声が聞こえる」「誰かが話しかけてくる」などと話した。催眠療法で内面に分け入ると、60人以上の人格が潜んでいた。心に深い傷を残す衝撃的な体験をしたはずだったが、福井はそれが何なか把握できなかつた。

見えたものを写真のように記憶できる能力も持つていた。教科書を何ページも覚え、頭の中でペー

ジをめくり、ズームすらできたといふ。

河合隼雄の超天才少年

河合隼雄の勧めで精神科に

子どものころの福井は無類の本好きで、どの科

目でも成績はよかつた。しかし学校、特に中学・

高校は苦痛だつた。福井が振り返る。

「規律の厳しい校風が合わないのもありましたが、A D H D (注意欠陥多動性障害) でしたので、授業を50分間ずっと聞いていられなかつたんです。

数学の時間には英語を、歴史の時間には数学を勝手にやるといった感じでした。だから、学校で何を習つたという記憶はないんです」

「暴力や犯罪はモラルや倫理の問題だとして、科

学や医学に含めるのは世界的に抵抗が強い。ケア

すべきは被害者だという声も大きく、加害者にも

治療が必要という考えは一種のタブーになつてい

る。そんな状況で、チャレンジングな発表をして

いる姿を見て、この人は伸びると思いました」

そう話すのは、国立精神・神経センター精神保

井に電話があつた。彼女だつた。「きのう、父と

ホテルに行きました」。冷静さには自信のある福

井だが、この電話以降、この日の診察のことは覚えていない。40代半ばの父親は、遠洋漁業の漁師でアルコール中毒だつた。女子中学生は、性的虐待は小学校低学年から続いていること、派手な下着をつけさせられセックスを強要されることなどを打ち明けた。福井が父親に問うと、「娘に愛情をもつて接してなにが悪い」と返ってきた。

福井が打ちひしがれたのは、こうした父娘の存在により、自分の非力さだつた。問題は父親の病的性質にあることは明らかだった。精神科医として娘の苦しみに一緒に向き合うことはできたが、根本解決においては役に立たなかつた。

「このときの無力感が、被害者をなくすために加害者をなくす、現在の活動につながつています」

です。その意味で、勇気のある人だと思います

多数のストーカー事案に関わってきた都内のカ

ウンセラー、小早川明子はそう話す。

加害者、それも性犯罪の加害者への医療提供を唱える福井は、批判を浴びることも少なくない。

目立つのは、「救うべきは被害者」という声だ。

福井の活動の原点は、ある被害者と向き合つた経験にある。

京都大学医学部を卒業した福井は、その翌年、福井県小浜市の公立小浜病院の精神科医となつた。

ほどなくして、父親に連れられて女子中学生が来院した。リストカットの常習者で、「赤ちゃんの泣き声が聞こえる」「誰かが話しかけてくる」などと話した。催眠療法で内面に分け入ると、60人以上の人格が潜んでいた。心に深い傷を残す衝撃的な体験をしたはずだったが、福井はそれが何なか把握できなかつた。

見えたものを写真のように記憶できる能力も持つていた。教科書を何ページも覚え、頭の中でペー

ジをめくり、ズームすらできたといふ。

河合隼雄の超天才少年

河合隼雄の勧めで精神科に

子どものころの福井は無類の本好きで、どの科

目でも成績はよかつた。しかし学校、特に中学・

高校は苦痛だつた。福井が振り返る。

「規律の厳しい校風が合わないのもありましたが、A D H D (注意欠陥多動性障害) でしたので、授業を50分間ずっと聞いていられなかつたんです。

数学の時間には英語を、歴史の時間には数学を勝手にやるといった感じでした。だから、学校で何を習つたという記憶はないんです」

「暴力や犯罪はモラルや倫理の問題だとして、科

学や医学に含めるのは世界的に抵抗が強い。ケア

すべきは被害者だという声も大きく、加害者にも

治療が必要という考えは一種のタブーになつてい

る。そんな状況で、チャレンジングな発表をして

いる姿を見て、この人は伸びると思いました」

そう話すのは、国立精神・神経センター精神保

井に電話があつた。彼女だつた。「きのう、父と

ホテルに行きました」。冷静さには自信のある福

井だが、この電話以降、この日の診察のことは覚えていない。40代半ばの父親は、遠洋漁業の漁師でアルコール中毒だつた。女子中学生は、性的虐待は小学校低学年から続いていること、派手な下着をつけさせられセックスを強要されることなどを打ち明けた。福井が父親に問うと、「娘に愛情をもつて接してなにが悪い」と返ってきた。

福井が打ちひしがれたのは、こうした父娘の存在により、自分の非力さだつた。問題は父親の病的性質にあることは明らかだった。精神科医として娘の苦しみに一緒に向き合うことはできたが、根本解決においては役に立たなかつた。

「このときの無力感が、被害者をなくすために加害者をなくす、現在の活動につながつています」

です。その意味で、勇気のある人だと思います

多数のストーカー事案に関わってきた都内のカ

ウンセラー、小早川明子はそう話す。

加害者、それも性犯罪の加害者への医療提供を唱える福井は、批判を浴びることも少なくない。

目立つのは、「救うべきは被害者」という声だ。

福井の活動の原点は、ある被害者と向き合つた経験にある。

京都大学医学部を卒業した福井は、その翌年、福井県小浜市の公立小浜病院の精神科医となつた。

ほどなくして、父親に連れられて女子中学生が来院した。リストカットの常習者で、「赤ちゃんの泣き声が聞こえる」「誰かが話しかけてくる」などと話した。催眠療法で内面に分け入ると、60人以上の人格が潜んでいた。心に深い傷を残す衝撃的な体験をしたはずだったが、福井はそれが何なか把握できなかつた。

見えたものを写真のように記憶できる能力も持つていた。教科書を何ページも覚え、頭の中でペー

ジをめくり、ズームすらできたといふ。

河合隼雄の超天才少年

河合隼雄の勧めで精神科に

子どものころの福井は無類の本好きで、どの科

目でも成績はよかつた。しかし学校、特に中学・

高校は苦痛だつた。福井が振り返る。

「規律の厳しい校風が合わないのもありましたが、A D H D (注意欠陥多動性障害) でしたので、授業を50分間ずっと聞いていられなかつたんです。

数学の時間には英語を、歴史の時間には数学を勝手にやるといった感じでした。だから、学校で何を習つたという記憶はないんです」

「暴力や犯罪はモラルや倫理の問題だとして、科

学や医学に含めるのは世界的に抵抗が強い。ケア

すべきは被害者だという声も大きく、加害者にも

治療が必要という考えは一種のタブーになつてい

る。そんな状況で、チャレンジングな発表をして

いる姿を見て、この人は伸びると思いました」

そう話すのは、国立精神・神経センター精神保

井に電話があつた。彼女だつた。「きのう、父と

ホテルに行きました」。冷静さには自信のある福

井だが、この電話以降、この日の診察のことは覚えていない。40代半ばの父親は、遠洋漁業の漁師でアルコール中毒だつた。女子中学生は、性的虐待は小学校低学年から続いていること、派手な下着をつけさせられセックスを強要されることなどを打ち明けた。福井が父親に問うと、「娘に愛情をもつて接してなにが悪い」と返ってきた。

福井が打ちひしがれたのは、こうした父娘の存在により、自分の非力さだつた。問題は父親の病的性質にあることは明らかだった。精神科医として娘の苦しみに一緒に向き合うことはできたが、根本解決においては役に立たなかつた。

「このときの無力感が、被害者をなくすために加害者をなくす、現在の活動につながつています」

です。その意味で、勇気のある人だと思います

多数のストーカー事案に関わってきた都内のカ

ウンセラー、小早川明子はそう話す。

加害者、それも性犯罪の加害者への医療提供を唱える福井は、批判を浴びることも少なくない。

目立つのは、「救うべきは被害者」という声だ。

福井の活動の原点は、ある被害者と向き合つた経験にある。

京都大学医学部を卒業した福井は、その翌年、福井県小浜市の公立小浜病院の精神科医となつた。

ほどなくして、父親に連れられて女子中学生が来院した。リストカットの常習者で、「赤ちゃんの泣き声が聞こえる」「誰かが話しかけてくる」などと話した。催眠療法で内面に分け入ると、60人以上の人格が潜んでいた。心に深い傷を残す衝撃的な体験をしたはずだったが、福井はそれが何なか把握できなかつた。

見えたものを写真のように記憶できる能力も持つっていた。教科書を何ページも覚え、頭の中でペー

ジをめくり、ズームすらできたといふ。

河合隼雄の超天才少年

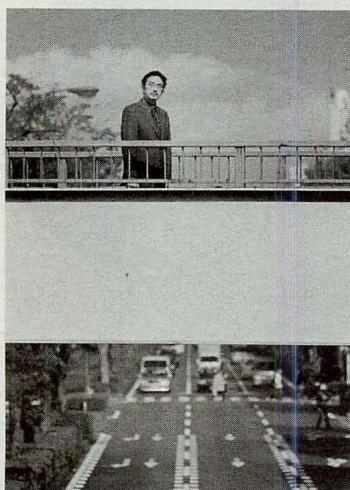
河合隼雄の勧めで精神科に

子どものころの福井は無類の本好きで、どの科

目でも成績はよかつた。しかし学校、特に中学・

高校は苦痛だつた。福井が振り返る。

「規律の厳しい校風が合わないのもありましたが、A D



精神病患者を「鎖から解放」したフランス人精神科医フィリップ・ピネルに私淑する。「人道の流れとして、そっちに向かっていくはずだと確信しています」

■ふくい・ひろき

1969年 米インディアナ州で誕生。大学院生で留学中だった父康裕(東京電機大教授)と母千賀子の第1子。

72年 ウィスコンシン州でモンテッソーリ教育の幼稚園に入り、園内を飛び跳ねるウサギと真っ裸で戯れる。「桿に入れられるのが嫌い」(福井)な性格が芽を吹く。

74年 川崎市の幼稚園に入る。「人数が多くて窮屈なうえ日本語ができなかったので、よく熱を出しました」(千賀子)

76年 埼玉県中部の新興住宅地に引っ越す。地元の小学校に通う。

82年 男子進学校の巣鴨学園(東京)に中学・高校と通う。理系科目が得意で、物理は全国模試で1位も。「宿題をやってこないで先生に『出しました』と言いつぶなど、教師の心理を読んで反応を面白がるところもありました」(同級生の千葉大憲)。中2のとき都内に引っ越し。

88年 京都大学工学部入学。

92年 同卒業。卒論テーマは食物の放射線量。

93年 京都大学医学部入学。

99年 同卒業。京都大学医学部附属病院の研修医として、精神科医のキャリアをスタート。

2000年 公立小浜病院(福井県小浜市)勤務。「黒い背広が決まっていて、ピカピカの靴とアッシャーケースみたいな鞄を持って、最初はマフィアかと思った。見たこともない催眠療法をしたり、患者を地域に帰して往診したり、これまで接した20人近い先生たちは全然違いました」(同病院精神科看護師の谷口敏子)

03年 京都医療少年院に勤務。殺人を犯した少年から薬の処方を頼まれると、「住所知ってるぞ」と自宅住所を正確に告げられる。「関わった人からいつか襲われるかもしれないと思うことがあります」(福井)

07年 国立精神・神経センター(現国立精神・神経医療研究センター)精神保健研究所に勤務。

10年 NPO法人犯罪加害者の処遇制度を考え会、性障害専門医療センター(SOME)設立。

12年 同研究所退職。

13年 開発した「ストーカー・DV加害者の危険度判定プログラム」を、警察庁が年度内に全国の警察で導入へ。

健研究所(東京)の元司法精神医学研究部長、吉川和男(現吉川クリニック院長)だ。

吉川の誘いで、福井は医師8年目に同センターに移籍。犯罪と脳の関連について研究を続け、NPOを設立して加害者対策にも乗り出した。だが、何をやるにも根回しや調整が必要な「公務員」の身分に嫌気がさし、昨春独立した。

を感じているからかもしれない。

高校3年のこと。福井は普段からいけ好かないと思っていた同級生に向かつて突然、バスケットボールを投げつけた。相手は松葉杖をついて体育授業を見学中だった。その点が特に問題視され、停学処分を受けた。大学生のときには、言いがかりをつけてきたチンピラ風の男の顔面をいきなり殴りつけ、走って逃げた。

いずれも凶悪犯レベルにはほど遠い。しかし、福井を知る人たちは彼について、「気持ちのベクトルがある方に向くとばつとやつてしまふ」「ならぬものはならぬ的な『社会正義』に懐疑的」と述べる。

とは言え、ふだんの福井にそうした面影はない。振る舞いは常に紳士然。他人の顔色をうかがうタクではないが、唯我独尊を気取つてもいいない。趣味は自転車、カメラと、至つて普通だ。

ただ、現時点での主張が「反社会的」なことは疑いない。

福井が治療の必要性を訴えた、広島地裁の男は結局、懲役12年(求刑同16年)の刑が言い渡された。判決は、「まずは犯罪に見合った責任刑に服させる必要がある」と、福井の意見を一蹴した。

田村栄治

1969年、北海道旭川市生まれ。朝日新聞、CNN、米コロンビアジャーナリズム大学院、文藝春秋編集部などを経て、2008年からAERA編集部で業務委託契約記者。

「精神障害と犯罪が直結するわけではないのは当然です。ただ、犯罪を繰り返す人の中には、やめられずに苦しんでいる人もいる。そうした人に医学的な問題がみられるなら、治療をするのは医師として当たり前のことではないでしょうか」
「悪」を見つめる福井の冷徹な目。それが支持を集めることは、いつだろうか。